

『赤い靴』

作◎長堀博士

登場人物◎

女1 (準新婚)

女2 (独身・赤い靴)

*台本上の「/」(斜線)は、普通の文章では「句読点」があつた場所に、その代わりに入れた記号です。気にせず読んで下さればいいのですが、一応説明すると、読み方としては、一切間を開けずに発話して下さい。うまい読み方としては、間はぜんぜん空けないのですが、発音としては句読点があつた時のものにするのと正解になる場合が多いです。

・
・
・

1.

(舞台は郊外の町。過疎化が始まった町は不便で、バスに乗らないと最寄りの駅まで行くことが出来ない。そんなバス停。ベンチシートがある。そのベンチシートに座り、バスを待っている女が1人。女1。本でも広げているかもしれない。

そこへ女2がやってきて、バス停の時刻表の看板を見て、自分の持っている時計(腕時計)、もしくは今ならスマホか)と照らし合わせたりしている。

女2の靴は赤い。もしかしたらその赤は他に身につけているものとは色が合わない印象である。)

女1「あのう、どうぞ。」(ベンチへいざなう)

女2「ああ、ありがとうございます。どうもご親切に。」(隣に座る)

女1「いえ。」

(しばしの沈黙。)

女2「……バス、来ませんね?」

女1「……」(気づかない)

女2「バス、来ませんね。……」

(……。女1、何気なく顔を上げると女2と目が合う。)

- 女1 「あつ、ごめんなさい、何ですか？」
- 女2 「いえ、バスが来ないなあって思ってた、」
- 女1 「ああ、ええ。」
- 女2 「聞こえませんか？」
- 女1 「はい？」
- 女2 「私の声。」
- 女1 「そんなこと。」
- 女2 「態度がうまく合っていないのかしら、マイクチェックマイクチェック、あー、あー。どう？」
- 女1 「えっ？ ああ、聞こえます、はい。」
- 女2 「なら良かった。」
- 女1 「マイク？」
- 女2 「ないけど気持ちよ気持ち、音のチェックってこんな感じでしょ？」
- 女1 「ええ、まあ、知らないですけど。」
- 女2 「こんな感じなの。」
- 女1 「はい。」
- 女2 「いつもですか？」
- 女1 「いつも、とは？」
- 女2 「バス、いつも来ないんですか？」
- 女1 「ああ、ええまあ、いつも来ないなんて事はありませんけど／時間、通りには滅多に。」
- 女2 「それは困りますね。」
- 女1 「ええ／でも、慣れてしまえば／まあ。」
- 女2 「まあ？」
- 女1 「そういうもんだと。」
- 女2 「へー……。」(わざとらしく長いことで、意味ありげである)
- 女1 「……」
- 女2 「これからお出かけですか？」
- 女1 「そうですね、そうなりますね。」
- 女2 「そうですね、バス待ってますもんね。」
- 女1 「お宅も？」
- 女2 「オタク？ 私のこと？」
- 女1 「ええ。」
- 女2 「どうして私がオタクだと？」
- 女1 「いえ、そっちのオタクじゃなくて／あなた、という意味の／お、た、く。」
- 女2 「あーあ／そっち？ でもオタクはオタクなんですよ／アニメ、毎日観ますから。」
- 女1 「アニメを毎日？」
- 女2 「ええ。いけませんか？」
- 女1 「いえ／もし、アニメを毎日観る人がオタクなら／私も、オタクかなって。」
- 女2 「観るの？」

- 女1 「ええ。」
女2 「毎日?」
女1 「毎日ではありませんけど、けっこう。」
女2 「どんな?」
女1 「んー、はやお駿。」
女2 「はやお?」
女1 「宮崎の。」
女2 「みやざき?」
女1 「ええ、トトロとか。」
女2 「あっ、お子さんど?」
女1 「いえお子さんはいないんです／主人は、いますけど。」
女2 「あっ新婚ね?」
女1 「そう見えます?」
女2 「見えます見えます。」
女1 「でも新婚ってほど最近では。」
女2 「何年?」
女1 「3年。」
女2 「さーん、準新婚じゃない!」
女1 「準新婚?」
女2 「新婚の次に新婚みたいな。」
女1 「そう言うの?」
女2 「言いません?」
女1 「さあ、ツタヤみたいな。」
女2 「ツタヤ!」
女1 「レンタルビデオ的な。」
女2 「そうですね、新しく新婚が入ったら／その横の、準新婚の棚に移るけど／まだ、旧作とまでは言わないと。」
女1 「変な例えですね。」
女2 「宮崎駿はオタクには入らないんです。」
女1 「えっ?」
女2 「カテゴリー。違うんです。ジブリと、それにピクサーも。」
女1 「そうなんですか?」
女2 「ええ。最近では誠もオタクから格上げになって。」
女1 「誠?」
女2 「新海。」
女1 「ああ、ね、本当に。ああ、ごめんなさい、ぼーっとしていたわけじゃなくって、ほら、さっき、さっきはあなたの赤い靴がちょうど目に入って。」
女2 「赤い靴?」

女1 「あなたの。」

女2 「ああ、ええ、目立ちますもんね。」

女1 「ええ。」

女2 「あの、初めてお会いした方にこんな話も何ですが。」

女1 「やめませんか？」

女2 「えっ？」

女1 「その話。」

女2 「でも、まだ話してもいないのに。バスまだ来ないんですよ？」

女1 「たぶん。」

女2 「じゃそれまで。」

女1 「でもいいんですか？」

女2 「何が？」

女1 「今言ったじゃないですか／『初めて、お会いした方にこんな、話もナニ』って。ナニってことはナニでしょ？」

女2 「ええ、いいんですいいんです／大したナニじゃないんで／本当、ぜんぜんアレでして／私、ね、最近悪い男に騙されているんですよ。」

女1 （けっこう大きくビックリする）「えっー？」

女2 「ビックリしますでしょ？」

女1 「ええまあ。」

女2 「こう見えて実はすごく不幸なんです。」

女1 「不幸！」

女2 「ええ。」

女1 「えっ騙されているんですか？」

女2 「ええ。」

女1 「今も？」

女2 「今も。」

女1 「現在進行形？」

女2 「ええ。」

女1 「過去進行形じゃなくて？」

女2 「違います／今も、ずーっと。」

女1 「分かりません分かりません分かりません。」

女2 「何が？」

女1 「だって騙されているって分かっているのに／それはつまり、まだ継続中ってことですよ？」

女2 「そうなりますね。」

女1 「今も騙されている。」

女2 「騙されています。」

女1 「じゃ騙されなさいんじゃないですか？」

女2 「……。えっ、どういうこと？」

女1 「だって、えっ？ つまり今騙されてるのは／あのう、自分の選択みたいなの？」

女2 「まさか／私だって、騙されたくなんかありません。」

女1 「じゃ／あの、えー！ やめればいいんじゃないですか！」

女2 「何を？」

女1 「騙されるのを。」

女2 「あーあ、でも困ったことに好きなんですわね。」

女1 「騙されるのが？」

女2 「違います／な訳ないでしょ／その男が。」

女1 「おと、男！ でも悪い男なんでしょ？」

女2 「悪い男です。悪です。」

女1 「どれくらい？」

女2 「んー、けっこう、見た目は…、そうは見えないんですが／脱ぐと、けっこう鍛えてあって／上腕、二頭筋とか胸筋とか／で、その中身が完全なワルです。」

女1 「どうワルなんですか？ 例えば殴るとか。」

女2 「殴りません。」

女1 「お金をせびる。」

女2 「せびりません。」

女1 「約束を守らない。」

女2 「あーっ、守らないといえれば守りませんね／待ち合わせ、必ず十分は遅れて来るみたいなの。」

女1 「その程度のワル？」

女2 「いいえいいえ／そんな、ことでワルなんて言いません。」

女1 「じゃ一体。」

女2 「他に女、作っているんです。」

女1 「女！」

女2 「もっとはっきり言うとなね／実は、結婚していることを内緒で私とも。」

女1 「結婚？ 内緒で？」

女2 「ええ。すっかり隠して私と付き合っていた／プロポーズも、されてるんですよ／3ヶ月前、でもさっき分かったばかりなんです／準、新婚なんですって。」

女1 「まあ準、ツタヤ的な。」

女2 「そうなんです／二股、って言葉知ってます？」

女1 「聞いたことがあります／私は、まだですが。」

女2 「まだ？」

女1 「ええ、したことも、されたことも、どっちも。」

女2 「ああ、それですそれ、フ・タ・マ・タ。」

女1 「そう、そうですか／それは、ご愁傷様で。」

女2 「私ね／それが、悔しくて悔しくて／相手の、女の顔を見てやろうと思って。」

女1 「相手って？」

女2 「二股の。」

女1 「見たんですか？」

女2 「ええ。」

女1 「顔。」

女2 「ええ。」

女1 「どうでした？」

女2 「それが分からないんです。」

女1 「な、何が？」

女2 「だって似てないんですよ。」

女1 「似て、ない？」

女2 「ワ・タ・シ・に。」

女1 「似てると一体どうなるんですか？」

女2 「だって好みってあるでしょ？ 人間ってなんだかんだ言って／好みの方向は一緒じゃないですか／好きに、なるのって。私○○と××と△△がみんな好きなんです

けど、ほーら、方向一緒でしょ？」

女1 「さ、さあ。」

女2 「でも二股の相手、女の顔、ゼーんぜん方向が違う／逆！ 私が右なら左くらいに

違う／話も、なんだか合わないしね。」

女1 「右と左ってどんな。」

女2 「赤と青くらいに違う。」

女1 「あなたが赤ですか？」

女2 「そりやそうでしょ／赤でしょ、私くらいになると。」

女1 「いや意味が分かりませんけど。」

女2 「それでね／あまりにも違うから／声を、掛けたんです。」

女1 「そう、今話が合わないって。」

女2 「話したんです。」

女1 「私の男と別れて下さい！とか。」

女2 「そんな、いきなり、まだそこまでは言ってます。」

女1 「じゃどういう風に話しかけたんですか？」

女2 「何気なく、そーっと。」

女1 「そーっと？」

女2 「『バス、来ませんね。』って。」

女1 「……。あっ、ごめんなさい。今ぼーっとしてまして。なんでしたっけ。」

女2 「マイクチェックマイクチェック／あーあー。」

女1 「はい、聞こえました。」

女2 「『バス、来ませんね。』って。」

女1 「あっ、赤い靴!」
女2 「はい?」
女1 「ほら、靴が赤いなーあって思ってた。」
女2 「ええ。そうね。そうなのね。」

2.

(と、突然、女1、立ち上がると体操を始める。)

女2 「……。ど、どうしてウォーミングアップ始めるの?」

女1 「私ね、ほら、なかなかバス来ないでしょ? その間、いつもこうやってカラダ動かしてるんです。」

女2 「へー!」

女1 「暇だから。」

女2 「健康的ですね。」

女1 「ほんと、健康が一番ね。トリヤー!」

女2 「それ、何か拳法的なあれですか?」

女1 「こういうエクササイズ。護身術も兼ねてね。トリヤー!」

女2 「私もやってみようかしら。」(立ち上がる)

女1 「ぜひ。」

女2 「トリヤー!」

女1 「うまいわ。はじめてにしては上出来よ。テイ!」

女2 「テイ!」

女1 「ウォリヤー!」

女2 「ウォリヤー!」

女1 「スジャータ!」

女2 「えっ? スジャー?」

女1 「スジャータ! ここで一端心を落ち着けるの。」

女2 「スジャータ!」

女1 「そうよ。ウーパールーパー!」

女2 「ウーパールーパー!」

女1 「シルベスタスタローン!」

女2 「シルベスタ?」

女1 「これで相手を撃退するのよ! シルベスタスタローン!」

女2 「シルベスタスタローン!」

女1 「シルベスタスタ・ローローン!」

女2 「シルベスタスタ・ローローン!」

女1 「ジャン・クロード・バンダム!」

女2 「ジャン・クロード・バンダム!」

女1 「そして最後、アーーーーーノルド！」
女2 「アーーーーーノルド！」

(二人声を揃えて「シユワルツネッガーーーーー！！」)

女1 「ああー、気持ちいいわね。」
女2 「でもまだ私には難しいみたい。」
女1 「謙遜っ！ けっこう上手かったわよ。初めてとは思えない。」
女2 「いえいえ。」
女1 「でも必要なのよ、いぎって時に体が動かないと、ね、困るから。」
女2 「いぎって時に？」
女1 「ええ、いぎって時に／いぎっ！」
女2 「えっ？」
女1 「いぎっ！」
女2 「こ、これから戦いですか？」
女1 「そうかも。いぎっ！」
女2 「じゃ私も、いぎっ！」

(構えたままの二人。)

女1 「……そんな、こったろうと思ってましたよ。」
女2 「思っていましたか。」
女1 「思ったた思ってた／私ね、こう見えて勘が鋭いほうなんです。」
女2 「えっ、本当に？ そうは見えませんかよ。」
女1 「勘が鋭いほうなんです。」
女2 「いえいえ／見えなーーーーい。」
女1 「もうね、すーーーーぐ分かっちゃう。」
女2 「まさか。」
女1 「本当。」
女2 「私／にぶくて詳しくお話ししないと分からない方かと思ってましたー。」
女1 「いえいえ／あらあら／どこで、そんな風に勘違いされたのかしら？」
女2 「じゃ知ってました？」
女1 「何を？」
女2 「自分が浮気されて二股掛けられていたってことー。」

(しばしの沈黙。女1倒れる。)

女2 「あーら予想外だったみたいですね／それで、勘が鋭いとは言えないんじゃないですか？」

女1 「撤回して陳謝します。どうもすみませんでした。」（女2とは逆の方向へ頭を下げ
て）

女2 「あーら降参がお早い。」

女1 「そうね、ま、どうでもいいってだけよ／こんなこと、くだらない。お茶でも飲む？
あーのど渴いちゃった。はい、これ、新しいから。私は飲みかけ持ってるから。」
女2 「あ、りがとうございます。」

（飲む、二人。）

女1 「ねえ、泥棒猫って言葉知ってる？」

女2 「泥棒猫？」

女1 「あれさ、何で猫なの？」

女2 「はい？」

女1 「猫である必要がある？ 犬でも狸でもよくない？」

女2 「なんかイメージが。」

女1 「ハクビシン！」

女2 「いやいや。」

女1 「私猫が好きなんです。飼いたい、飼いたいって言ってるんですけど／主人が、猫
アレルギーだって言い出して。」

女2 「じゃ仕方ないんじゃないですか？」

女1 「それで近所の野良猫に『タマ』って名前つけて可愛がってるんですけど／どうも、

隣の家では『マリリン』なんて名前付けられて餌もらってるみたいなのよね。」

女2 「タマ！ そうよタマ！」

女1 「そうよね、猫って言ったら『タマ』。」

女2 「いえそうじゃなくて／タマですよタマ、サザエさんサザエさん。」

女1 「何の話？」

女2 「サザエさん家の猫です。」

女1 「それが何？」

女2 「だから、♪お魚くわえたドラ猫、おーおかけて、」

女1 「裸足で、掛けてく、」

二人 「愉快的サザエさん！」

女2 「ね、この歌、この歌の所為で私たち、猫が泥棒をするものと洗脳されてしまった
んです。」

女1 「ああ、そうね、そうかも。ああサザエさんの力って恐ろしいわね。」

女2 「ええ。」

女1 「でもさ／この歌の、中の猫と家で飼ってる『タマ』は別の猫でしょ？」

女2 「えっ、そうなの？」

女1 「そりゃそうでしょ、『タマ』がそんな悪いことする？」

女2 「んー、確かにあの猫は何もしない。ただ居るだけの猫って気がする。」

女1 「ね、そうよ、ただ居るだけの猫なのタマは。」

女2 「ええ。」

女1 「泥棒犬!」

女2 「えっ?」

女1 「あなたに言ったの、泥棒犬!」

女2 「犬?」

女1 「猫は好きなの、犬ならOKよ。」

女2 「意味が分からない。」

女1 「泥棒犬!」

女2 「ワン、ワンワン、違うな、ねえそれなら、カピバラでもいい?」

女1 「カピバラ?」

女2 「ネズミ科の中では世界最大、温泉大好きカピバラよ。」

女1 「好きなの?」

女2 「とーっても。」

女1 「泥棒カピバラ!」

女2 「はーい!」

女1 「泥棒カピバラ!」

女2 「はーい!」

女1 「いや違うでしょ! ぜんぜん違うでしょ! これはそういうあれじゃないでし

よ! いろいろ間違ってるでしょ、それじゃ! 一体あなた、そもそも何しに来た

の?」

女2 「えっ?」

女1 「だって間違ってるでしょ? 根本。根本よ。そもそも何で私? なんで私のトコ?

私も被害者でしょ、ある意味同じ立場でしょ/この場合、あなたが苦情を言いに行

くのはどこ? ねえ夫の、あの男のところなんじゃないの/違う?」

女2 「……」

(しばしの沈黙。二人、一回ブレイクする。ベンチに座り、飲み物を飲んだりとか。)

3.

女2 「指輪、してるんですね?」

女1 「えっ? そりゃ、まあ。」

女2 「あの。」

女1 「なによ。」

女2 「薬指って、さ。」

女1 「薬指?」

女2 「あの、薬指ってき、なんで薬指って言うんだろうって。」
女1 「ど、どうしたの突然。」

女2 「突然じゃないのよ／私にとっては、実は前々から気になってたんだけど／すぐに、忘れるから分からないままだったなっ／今急に。親指は分かるでしょ、一番大きくて親指ってイメージある、人差し指は実際それで人を指すし、中指は真ん中、小指が一番小さい、で、薬指って何？ どういうこと？」

女1 「それを乾燥させて砕いて飲むと胃薬になる。」

女2 「うそっ！こわっ！うそっ！こわっ！」

女1 「嘘よ。なわけないでしょ／薬指は、あれよ、薬を塗る為の指なんだって。」

女2 「薬を、塗る？」

女1 「そう。」

女2 「この指で？」

女1 「らしいわよ。オロナインとか。」

女2 「えっ／私、薬指で薬塗ったことない！」

女1 「そうなの？」

女2 「うん。たぶん一回も、生まれてから一度も薬塗るのに薬指使ってない！」

女1 「じゃどの指使うの？」

女2 「そりゃ、人差し指でしょ、えっ、みんなそうなんじゃないの？」

女1 「あなたが知らなかっただけで／あなた、以外のみんなは全員、薬指を使っているのよ。」

女2 「ま、マジで？」

女1 「マジで。」

女2 「うそー、知らなかった。やりづらくない？ 薬指よ、けっこう不器用なコイツよ。」

女1 「みんな訓練してるから。」

女2 「訓練？ 薬指の？」

女1 「そりゃそうよ／器用に、薬指で薬塗れる様に子供の頃に訓練するものなのよ／オロナインを使って。」

女2 「オロナインで？」

女1 「あなた何も知らないのね／オロナインは、その為に使われた薬なのよ。」

女2 「本当に？」

女1 「ニベアもね。」

女2 「ニベアも！」

女1 「そんなことも知らないで生きてきたの？ ああ／あなた、「いい爺さん」に連れられて行っちゃったって思ってたクチでしょ？」

女2 「いい爺さん？」

女1 「異人さんよ、本当は。」

女2 「分からない分からない、何の話？ 根本的に話について行ってない。」

女1 「赤い靴よ／赤い靴、赤い靴はいてた女の子の歌知ってるでしょ。」

女2 「私？ 私の歌？」

女1 「いやいや、えー知らないの？ まさか女の子が赤い靴を履いているって歌？ 知らないの？」

女2 「うん。知らない。歌って。」

女1 「……。♪赤い靴、はーいてた、」

女2 「それからそれから！」

女1 「♪女の子、異人さんに、」

女2 「えーどういことどういこと！」

女1 「♪つーれられて、行っーちゃった。」

女2 「こわっ！やばっ！こわっ！」

女1 「そ、そうね、考えてみたらこれって拉致ね。あなたこの歌ぜんぜん知らなかったの？」

女2 「いや知ってた。思い出した。」

女1 「なーん（なーんだの省略形）。」

女2 「思い出し、すぎた。」

女1 「すぎた？」

女2 「うん。この童謡に出てくる赤い靴の女の子は実在するという定説と、それは捏造だという説があるみたいなの。『きみちゃん』、実在するなら『きみちゃん』って名前。でもその二つの説はずっと平行線を辿ったまま／いまだに、解決していないって話。拉致じゃなくて／養女よ、養女として宣教師の夫婦に引き取られたという話。ただその女の子を産んだ母親『かよ』は／自分の、娘は宣教師に連れられアメリカへ渡ったという話をずっと信じたまま、亡くなったって話。けれど実際は結核でアメリカには連れて行けず／日本の、孤児院で9歳で死んだらしいって話もあるし。」

女1 「ん？ えーとつまり、異人さんに連れられて行っちゃって「ない」ってこと？」

女2 「それが事実なら。ただこの歌の作詞家・野口雨情は社会主義の詩人として有名で／この赤い靴とは、社会主義が挫折してどこかへ行ってしまったって比喻でしかないというのが、この話の捏造説の方の考えね。」

女1 「で、本当はどうなの？」

女2 「分からないなんてことがあるの？」

女1 「分からないなんてことがあるの？」

女2 「歴史とはいったってある意味、今現在生きている人の都合で捏造された物語ではないのよ。過去というすでに目の前には存在していないものは／解釈という、形でしか表すことが出来ない／解釈、つまり裝飾された真実とは別のもののこと。だから真実なんてものにはどこまで行っても、どこまで行っても決してたどり着けないのよ。」

女1 「ど、どうしたの急に、なにか意味ありげに。何の話からそんな話に？」
女2 「わ、た、し、が本当は／ここに、来た理由、実はこれを伝えるために来たと言ったら驚く？」

女1 「はつきり言って驚くわね。意味わかんないし。」

女2 「そうね、本当言う私にも意味わかんないし。」

女1 「てい！ 何よ／あのさ、なんでこんな話になってるの？／そもそも、何の話が原因？」

女2 「あのさ、指輪指でいいんじゃないの。」

女1 「えっ？」

女2 「この指、薬指じゃなくて、指輪指。」

女1 「あっ、そこに話が戻ったのね！」

女2 「だってほら、するでしょ／婚約しても、結婚しても／単に、付き合ってるだけどもさ／この指に。この指に。」

女1 「でもさ、ねえ、もし一生独身の人が居た場合、いやいるのよ、けっこういるの、多いの。あなたもまだなんでしょ？ それがさ、この指を指輪指？ 言わせるの？ その名前で。」

女2 「えーだって私だって薬なんて塗ってないのよこの指で。」

女1 「それとこれはとは話が別、これはフェミニズムの問題。」

女2 「フェミニズム！」

女1 「そうよフェミ……、いやあのさ、ねーねー、また脱線。」

女2 「脱線？」

女1 「あーもうやんなっちゃう／話よ話。話をもっと、ずーっと先に巻き戻すと、…なんだっけ。そうよ、そもそもはあなた何しにここへ来たの？ いいえ、そうじゃなかった、えーと、そもそも文句を言いに来る先はどこ？ あたしのところへ来たって何にも。」

(ここから雰囲気が変わっていく。例えば音楽とか。)

女2 「……ええ。そうね。もちろんそうよ／話を、ずっと先へ巻き戻すわね。」

『薬指ってさ、なんで薬指って言うんだらう』いいえ、もっと巻き戻す。

『お魚くわえたドラ猫、おーおかけて、』いいえ、もっとよ。

『アーアーアーノルド・シユワルツネッガーアーアーアー』もっと。

『宮崎駿はオタクには入らないんです』もっと。

『感度がうまく合っていないのかしら、マイクチェックマイクチェック、あー、あー。』
もっと。

『バス、来ませんね？』、さらにもっと巻き戻す。」

女1 「もっと？」

女2「ええ。もっともっと。ここに来る前よ／私、行ったんです／ここへ、現れる前に／彼のところへ／あの人の、ところへ。私たちを騙していた悪い男のところ／文句を、言いにね／そして、私的には離婚を迫るために／だって、そりやそうでしょ／でも、ダメだったあー。私ぜんぜん冷静になれなかった／怒り心頭、バーンって感じ／大暴れ。そして感情に任せて近くに置いてあった優勝トロフィーを振り上げてしまった。」

女1「優勝トロフィー？」

女2「たまたま近くにあったの、こういう場合／なぜだか、絶対近くには優勝トロフィーが置いてある／で、案の定右手を伸ばして触ったのは優勝トロフィーだった／左手に、はクマの木彫りの人形。」

女1「クマまで？ えっ、まさかあなた、えっ？ えっ？ 夫を殺したなんて言うんじゃないでしょうね？／それを、告白するためにここへ来たなんて。」

女2「……いいえ。そうだったら良かった。でもあなたも知ってるでしょ／あの人の、体格。『そうは見えないんですが／脱ぐと、けっこう鍛えてあって／上腕、二頭筋とか胸筋とか』、ラグビー？ なんのスポーツだったかしら／昔やってたんですよ？ 私優勝トロフィーと木彫りのクマを持ってたってダメよ／ぜんぜん、歯なんか立たない／思いつきり、殴られてね、顔面にこぶしがめり込んだわ、吹っ飛ばされてね、こういう場合／なぜだか、絶対近くには机のへり、そこへ頭を打ちつけた。血がどばどば出てね、すごい、私の真っ白い靴が赤く染まっていくのを／どんどん、い、意識が／遠のいて、い、く、中／私は、見、た、の……」

女1「……えっ？ あの、どういう……、あなたまさか……」

女2「ふふふ、ただ雑談してたんじゃないのよ／あなたが、どんな人だか、いい人かどうか知っておきたかったの／あなたが、まさか私と同じ運命を辿らないために／いい人なら、ね、警告しておきたかったの／あなたの、夫はもう、人殺しだって。じや。」

女1「えっ、ちょっと、じゃって。あっ。」

(女2、スキップして去っていく。その去っていく方向を見て、手で口を押さえて、目が釘付けになる。
溶暗。バスがやってきて、そこに止まり、ドアの空く音。)

(女1、独白。音楽。)

女1「信じ、られないかも知れませんが／その時、彼女が去っていく姿がスツと見えなくなっただけです／一瞬、消えたと思っただけでも、靴だけが。赤い靴だけがスキップし続けて／まるで、踊るみたいにして遠くへ去っていった／それで私、ああ思っ出したんです。もう一個あった。もう一個、もう一つの『赤い靴』／童謡とは、別もの／アンデルセンの童話。何かの呪いで履くと死ぬまでずっと踊り続けなくてはならない赤い靴の話。でも私の記憶が確かなら主人公の、女の子は本当は死ぬまで踊ったりなんかしてないはず／確か、どうとう彼女は最後には、自分で自分の両足を切り落として／助かる。そして赤い靴は切り落とされた足と共に／踊り、続けながら／どこかへ、遠くへ、消えていった。今夜私、もしかしたら主人を殺してしまいかもしれません。」

(音楽の中、溶暗。)

終わり。